

時事特別企画

解説

第2部 現代世界と中国の影

米中共存時代の幕明け

第二次世界大戦後の世界は、国際的な平和維持機構として新しく生まれた国連を中心に戦後世界秩序の再建をはかってきました。その中心をになったのは、米・英・仏・ソ・中（国府）という、いわゆる戦勝五大国でした。周知のように、戦後まもなく開始された冷戦（西側の資本主義陣営と東側の社会主義陣営を二つの中心とした東西対立）の結果、アメリカとソ連が東西両陣営のそれぞれの盟主として国際政治を左右してきました。

一九六〇年代にはいと、一方では従来、兄弟の契りを結んでいた中ソ間に対立が生じました、ドゴール大統領のフランスが大きな発言力を持ったり、西ドイツが復興してEC（ヨーロッパ共同体）を背景に大きな力を蓄積し、アジアでは日本が著しい経済成長を遂

日中国交回復の機運が熟してきたといわれる今、私たちは、広い視野のうえにたった、主体的な中国観を確立しなければなりません。ここでは、世界そして日本の中国との関係を一緒に考えてみよう。



中嶋嶺雄
(東京外語大助教授・国際関係論)

げるなど、国際社会は多元的・多中心的な展開を見せはじめたのです。

一九七〇年代は、アメリカがベトナム戦争「敗北」の教訓からアジアからの撤退を開始するとともに、文化大革命を収拾した中国との接近をはかり、米中共存の時代が幕明けしようとしています。今日の世界は、米ソ共

存、米中共存、中ソ対立という大きな座標軸のうえに、米・中・ソの三極構造が定着しつつあるように見られます。

中国の国連参加の意義

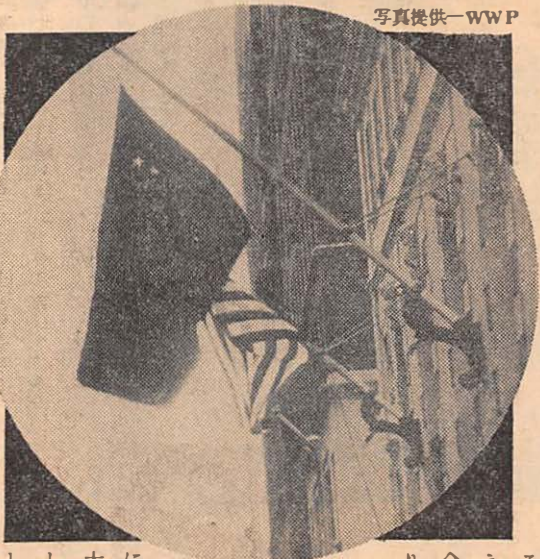
以上のような戦後国際政治史の大きな流れのなかで、それでは国連は国際的な平和維持機構に紛争処理機関として常に有効かつ適切に機能してきたかといえますと、残念ながら必ずしもそうではなかったといわざるをえません。いやむしろ、戦後世界の重要な地域紛争を、国連ほとんど解決しえなかったといってもいいでしょう。朝鮮戦争、インドシナ戦争、中東戦争、ベトナム戦争、そして今回の印、パキ戦争に至るまで、実際には国連以外の場で問題が解決ないしは処理されてきたのが現実です。

そして、そのように国連が無力化した原因の一つは、全世界の約四分の一の人口を有し、国際社会にますます大きな影響力をもちはじめたアジアの大國・中華人民共和國が、国連にはいつていないからだという意見が強く存在してきました。

確かに、このような中国が国連に参加して

星条旗とともにそびえる中国、五星紅旗（ニューヨーク）

写真提供-WWP



ることになったことは、当然といえばそのとおりですが、国際社会全体にとっての大きな出来事であり、前進であったと思います。つまり、国連は制度的・組織的に一段と正常化され、より完全なものに近くなったといえるのです。

だが同時に、ここで重要な問題は、それでは中国の国連参加によって、国連の実質的な機能が大いに強化され、国連の権威が著しく高まるかどうかということでしょう。

中国は、国連での中国代表の演説を通じて、中国は米ソの二つの「超大国」による国連の支配、世界の支配を許さず、中国は世界の中小国・弱小国の味方になるのだということとを宣言しました。そして、このような中国の原則的立場が、アメリカをそして特にソ連を刺激し、従来は国連の外にあった中ソ対立がそのまま国連の場に持ち込まれることになることは明白です。

しかも、中国自身、従来と違って、国連安

保常任理事国という国際政治のひのき舞臺における「体制側」の一員となっただけに、好むと好まざるとにかかわらず、国際的パワー・ポリティクス（権力政治）の磁場に引きずりこまれ、そのために、ときにはきわめて大国主義的な行動をとることになるのではないのでしょうか。国連では、従来以上に大国間の対立がむきだしになり、いたずらに「会議は踊る」ということにもなりかねないといえましょう。

今回のパングラデシュ・ベンガル独立運動に端を発した東パキスタン暴動、そして印パ戦争にたいし、中国は、あまりにも深刻な国内差別のもとにあった東パキスタンのベンガル人独立という血の雄叫びを無視したばかりか、抑圧者である西パキスタン軍政権を一貫して支持し、これに武器を援助しました。そこには、中国自身のナショナル・インタレスト（国益）が大きく作用していたのです。そうした背景のなかで印パ戦争をめぐる国連の討議に際し、中国はインド非難・ソ連非難の立場をとりながら、やはりみずからも大国主義的な行動をしています。そして、紛争の本質的な解決はますます遠のくばかりな

いないことは不自然です。ましてや、台湾の国民政府が中国大陸を過去二十二年間にわたって一度も統治したことがないのに、この国民政府が全中国を代表する資格で国連に席を占めていたことは、どう考えても道理にあわなかったという人もいます。

その点で、戦後国連史の長い歩みの末に、右のような虚構が世界の大勢によって拒否され、中華人民共和国が、今回、国連に参加す

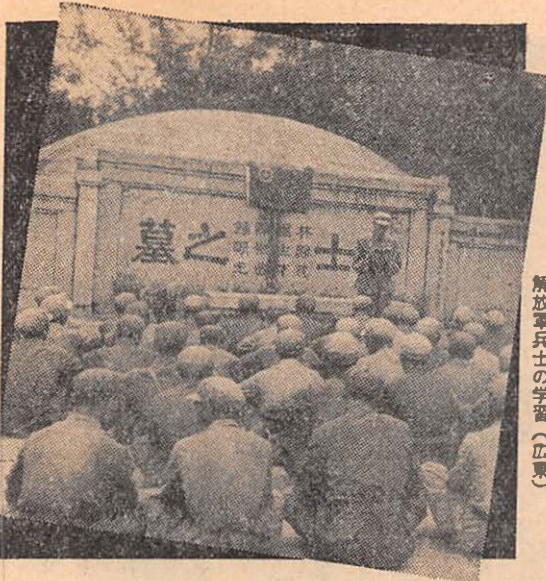
のだともいえましよう。

以上の点に、中国の国連参加の意義と、そのことがもつ今日的な意味とが二重に重なって現われていると思います。

世界に広がる中国の影

いずれにせよ、今日、中国の影は様々な陰影を伴って、広く深く世界に広がりがつつあるといえましよう。ニクソン訪中に踏み切ったアメリカも、結局は、このような中国の影を意識すればこそ、今日のような大きな政策転

解放軍兵士の学習（広東）



換を実行したのだと思います。

また、今日わが国では、日中国交回復の正常化を目ざす様々な潮流が、政治的・経済的あるいは社会的に高まっていますが、今後、当面、そのような潮流は、わが国の対外政策を考えるうえで最大の問題になってゆくだろうことも疑いありません。

また、たとえば今日の東南アジアを見てみると、そこには、中国の影が二重、三重の陰影となって広がりがつつあります。すなわち、アジアに進出しつつある中国そのものの影、

東南アジア各国の内部にあって「毛

沢東思想」の影響を受けた革命勢力がもたらす中国の影、「一本の椰子の木の下には三人の華僑がいる」といわれるほどアジア社会の内部に広く存在している華僑（海外に流出した中国人）を通しての中国の影がそれです。

このように、世界史の最も新しい局面のなかに、中国の影が、大きくクローズアップされてきていることこそ、現代世界の大きな特徴なのですが、それではなぜ中国

の影はそうのように大きな存在となっているのでしょうか。

第一に、七億五千万という膨大な人口を有する国家が、広大な中国大陸に革命政權を打ちたて、一九世紀初頭以来、この国が経験した悲惨と混乱と、そして貧困の歴史をかみしめたのち、新しい統一国家として出現したという中国革命史の巨大な営み自体が、中国の影をクローズアップさせる根本的要因になっていることはいうまでもありません。

つまり、帝国主義段階の世界史が生み出した歴史の醜い断層の最下底から、この中華人民共和国という、強大な社会主義国家が出現したのであって、そのこと自体が、既成の世界秩序、ないしは資本主義世界にたいする根本的な挑戦になってきたといえるのです。

そして、第二には、そのような中国は、国際共産主義運動の一つの中心的な存在であり、中国共産党は一九六〇年代以降、ソ連をはじめとする既成の社会主義諸国を「現代修正主義」の国だと規定し（ソ連については「社会帝国主義」と規定）、これらの社会主義勢力をも打倒の対象にするというその激しい現状打破の姿勢が、様々なかたちの中国の

影を刻みつけてきたからだと思えます。

この点で中国は、「毛沢東思想」に見られるように、「貧困のユートピア」を絶対化し、そこに人類救済の理想を求めて突き進んできたのですが、そのような中国は、いまみずからが国際社会の正式な一員となり、中国自身の「国際化時代」を迎えようとしているだけに、今日の中国が従来の価値観をそのまま維持できるかどうか、大きな歴史的転換点に立っているといえましよう。

そして第三には、右の点とも関連しますが、一九六〇年代後半を吹き荒れた文化大革命(劉少奇・国家主席、鄧小平・党総書記をはじめ膨大な数の指導者が失脚)、かつての彭徳懐・国防部長らの失脚、そして、あれほどの激動を経たのちに「毛主席の親密なる戦友」だとして、新しい党規約のなかでも正式に毛沢東の後継者と規定された林彪・党副主席も今回、去る九月中旬の「異変」前日に失脚したのではないかとみられます。

そのように巨大な影を広めつつある中国のその内部では、建国後、中国共産党内部に絶えず深刻な党内闘争が継続してきており、中央リーダーシップにおける政治的な危機や緊

張が絶えないことなど、これらの問題がもたらす重要性のうえに、いやがうえにも中国の影は、注目されるという問題があります。

第四には、このような中国は今日でも依然として極度の閉鎖社会であり、決して開かれた社会ではないことがもたらす問題がありましよう。閉鎖社会であるということは、また同時に完全な非情報性の社会であるということをも意味するわけで、わが国のように一般民衆の旅行や海外渡航が自由であるとか、新聞やテレビがありとあらゆる情報を提供するとか、様々な言論が自由すぎるほど展開されるとか、そのような社会では全くないことも指摘しておかなくてはなりません。

たとえば、アポロ十一号が月世界へ到着した事実も、中国の一般民衆には、まだ知らされていないのであり、また、文化大革命のときに、青少年である紅衛兵たちが、あれほど喜々として全国を潮歩(「経験交流」)できたのは、たとえば隣りの県(日本の郡程度の規模が多い)へ行くのにも、一般民衆すべて許可証を必要とするというような、社会の現実が、一方にあったからだともいえるのです。

ともかく、このような中国社会を日本社会と比べたとき、そこにはとつとも大きく大きな断絶があることを考えざるをえないでしょう。それだけに、私たちが住む「開かれた社会」の尺度だけで中国を推しやることもできないでしょうが、また逆に中国を理想化して、中国の立場を正当化することのみにとらわれるような虚弱な中国観によっても、日本と中国とのこの断絶を真に埋めることはできないでしょう。

私たちは、常に広い視野から世界の現実を、そして日本社会の現実を見つめながら、中国に対してもその虚像と実像を振り分け、その総合のうえに広く深く中国問題を考え、日中関係の将来を考えていかなければならぬと思います。

激動する中国がもたらすニュースが大きな衝撃を伴うものであればあるほど、それらの衝撃をまともに受けとめてなお動じないだけの主体的な中国観を確立することこそ、いまさし迫って必要な課題だといえましよう。

●参考文献(高校生向き) 中嶋嶺雄著

『現代中国入門』(講談社、現代新書、二四〇円)

『中国をみつめて』(文藝春秋社、六〇〇円)